



特集／太田川放水路概成50年

7本あった広島市の川

猿猴川、京橋川、元安川、本川(旧太田川)、天満川、太田川放水路と、市街地を6本の川が流れる広島市。美しい水辺とのんびり歩ける堤防の緑は、街の中のオアシスです。けれども60年余り前、広島市の川は、7本だったことをご存じですか。太田川は恵みを与えてくれると同時に、たびたび暴れて大きな被害をもたらしました。太田川の洪水を防ぐため、先人たちが取り組んだ大改修について紹介します。

アストラムラインからみた大芝水門(左)と祇園水門(放水路の水門)

広島市の三角州のほとんどは昔、海でした。太田川が運んできた土砂が堆積して新たな土地ができ、広島湾には多くの干潟が広がっていました。江戸時代には、遠浅の広島湾は次々と干拓され、現在の三角州の地形の基礎ができあがりました。

城下町の時代から続く水害との戦い

海拔ゼロメートル地帯が多く、海の干満差も大きい広島城下はたびたび洪水に見



大正8年の洪水(相生橋電車鉄橋) 所蔵:市公文書館

舞われました。大洪水で被害を受けた広島城を「無断で修築した」として、福島正則が処罰されてしまった話が残っています。

江戸時代も太田川の治水は大変な仕事でした。城側の堤防を高く作って城を守ったり、水の流れや勢いを制御する石垣などの設置、川のしゅんせつ(川ざらい)や水害防御用の植林、河口への土砂堆積を防ぐため、川の水で土と砂鉄を分別する「鉄穴流し」の禁止などを行いました。度重なる洪水はその後も続きました。

時代を経て届く治水への願い

明治以降にも、広島はほぼ4~5年おきに大洪水に見舞われ、特に大正8(1919)年の洪水では、市内の10本の橋が流出したほか床上浸水260戸、床下浸水2,351戸に上る被害が出ました。

明治29(1896)年の河川法により、主要河川の改修工事は国が実施すべきものと定められ、太田川の改修も大正10(1921)

年の改修計画に盛り込まれましたが、財政難から工事は実施されないうままでした。

大正から昭和の初めにかけては洪水が頻発し、広島市は大変な被害を受けました。改修工事を要望する声の高まりを受け、県と市は関係町村と連携し、地元負担などの目途を付け、国に働きかけました。その結果、昭和7(1932)年、帝国議会で太田川改修の予算が議決され、ようやく改修が着手されました。



大正12年の洪水(白島町・当時) 所蔵:市公文書館



いつも水量を見守っています

太田川は東区牛田新町で、太田川放水路と市内の川(旧太田川)に分かれます。ここに祇園水門と大芝水門があります。

普段は大芝水門は全開にして、放水路の祇園水門でゲートの操作が行われます。洪水になると、祇園水門を全開にして、大芝水門のゲートを操作し、太田川放水路と市内の川に流れる水の量を調節しています。



祇園水門(放水路の水門)

猿猴川

京橋川



車の来ない河川敷の緑地は格好のピクニック場所です

山手川

福島川

元安川

天満川

本川(旧太田川)



個性豊かな橋を見るのも楽しみです(写真は太田川大橋)

濃い水色の川は太田川放水路ができる前の川の流れです

本図は、(一財)日本地図センター発行の「地図で見る広島の変遷」より転載したものです

みんなの役に立っています

放水路はシジミ取りやハゼ釣り、カヌーの練習などに利用されています。

河川敷には緑地帯やグラウンドが整備され、いこいの場やスポーツにも利用されています。河川敷はグラウンドなど一部の施設を除いて、散歩やボール遊びなど個人利用は自由です。法律やマナーを守り安全で快適に利用しましょう。利用時はゲリラ豪雨や放水などによる急な増水や、濡れた足場からの落下など、身の安全に留意しましょう。



新己斐橋近くの「こいつ子ふれあいの水辺」のじゃぶじゃぶ池。広場では毎年秋にイベントが行われます

河川敷利用マナー8カ条

- ゴミは持ち帰る
- 迷惑になるような騒音(花火・大声^①)を出さない
- 自動車・バイクは周辺道路への違法駐車や、堤防への乗り入れ、駐車をしない
- パーベキューなどは直火(地面で直接火を燃やすこと)でしない
- 犬の放し飼いや、フンの放置はしない
- ゴルフの練習は行わない
- ラジコン飛行機などの使用をしない
- このほか、他の利用者に迷惑を及ぼす行為をしない



グラウンドゴルフ場でプレーを楽しむ地元の同好会



干潮でカキを鍛えるためのカキ棚があります



ボート部の練習などが見られます

豊かな生態系

潮の影響を受ける汽水域(海水と淡水が混ざる区域)や、河口付近は干潟が広がり上流とはまた違った環境が広がっています。アユやウナギ、シジミの漁場にもなっており、豊かな

生態系が広がっています。アユの稚魚などが太田川上流と海を歩き来しやすいよう、水門の流量調整なども研究されています。



放水路に流れ込む小さな川には緑や隠れるところがたくさんあり、カルガモなども多く訪れます



じっとしているとそと顔を出してきたヤマトオサガニ。土質によっていろいろなカニがすんでいます



干潟に生えたアシ(ヨシ)はさまざまな生き物のすみかになっています



河口に近づくとフジツボやカキなど海の生き物も目立ちます



40cm近い魚が浅いせきを出たり入ったりしていました



浅瀬では魚を狙って随所でコサギがたずんでいます

流れを変える大工事

当時、広島には太田川が分かれた猿猴川、京橋川、元安川、本川、天満川、福島川、山手川の7本の川が流れていました。この福島川、山手川を埋め立て、開削して大きな1本の川(放水路)に作り替え、大雨の時には市街地の川に流れ込む水量を大芝・祇園の水門で調整し、しかも大量の水を速やかに海に流すようにするのが太田川放水路の計画でした。

まず、下流から用地買収と護岸工事が始められましたが、戦争が激しくなるにつれ予算や人手の確保が苦しい状況になり、昭和19(1944)年に工事は一時中止となりました。

戦後の混乱を経て、昭和26年に本格的な工事が着手されました。放水路を渡る橋の架け替えや、道路や可部線、山陽本線の線路の変更など数々の大規模な事業も同時に行われました。



工事中の放水路(昭和37年) 所蔵:太田川河川事務所

昭和36年には放水路の要ともいえるべき水門の工事に着手し、昭和40年5月14日に通水式が行われました。そして一部残っていた堤防も完成し、昭和42年、多くの人々の協力により、着工から36年の歳月と145億円(平成2年の換算で約3,200億円)をかけて放水路が概成(小規模工事を残し完成)しました。

これからも自然と共存して

太田川放水路や堤防整備の効果により、



工事中の祇園水門(昭和38年) 所蔵:市公文書館

昭和18年9月の大洪水では浸水面積2,200ha、約1万2000戸の家屋が被害にあったのに対し、これを上回る水量の昭和47年7月の洪水では浸水面積200ha、被害家屋は約2,000戸にとどまり、下流域での一般被害は出ませんでした。完成以来、広島市の市街地を洪水から守り続けています。

現在も流量の管理や高潮対策、堤防の耐震化、上流のダムを整備など太田川の整備は続けられ、洪水を抑えたり、自然と共存した水の利用を進めています。

建設記録映画があります

国の大規模工事だった太田川放水路建設工事は、太田川工事事務所(当時)の職員目を通して、当時の世相を交えながら完成までの道のりを描いた記録映画「太田川放水路」として残されています。

平成26年にDVD化し、市内の小学校に社会科の補助教材として配布されました。一般の人も県立図書館で借りることができます。



interview 度々、床下浸水していたのがウソのよう

昭和25年頃、三篠町(横川駅の北)に住んでいた浅木禎子さん(74)にお話を聞きました。



小学校1、2年生の頃の記憶ですが、横川駅の前には地名の由来のとおり横に流れる川(福島川)があり、三篠町は東西の川(山手川、太田川本流)に

囲まれた低い土地でした。山手川の上の方は小さな浅い川で、水が少ない時にはヒョイヒョイと石の上を歩いて渡れるほどでしたが、梅雨や台風でち

よっと大雨が降ると、あっという間に町じゅうが水浸しになり、そのたびに家財が濡れないよう家族みんなで2階に持って上がったのを覚えています。半日もすると水は引いていたと思うので、潮の干満の影響もあったんでしょうか。年数回は床下浸水が起こっていたように思います。

川もすっかり埋め立てられ橋や堤防も整備されましたし、鉄道は高架になって、当時の様子は今では想像できないですね。